

会津碍子株式会社における人材育成に向けたQC検定の導入について

会津碍子株式会社 生産本部
品質管理部マネージャー 吉川 強

1.会社概要

当社は、1952年4月30日に創業し、今年で60年を迎えました。

当社の所在地である会津若松市は会津本郷焼で有名な会津美里町に隣接しており、NHK大河ドラマ新島八重の生涯を描いた「八重の桜」の舞台となっています。また会津本郷焼は、はるか文禄（1593年）の時代にまでさかのぼり、ときの会津藩領主 蒲生氏郷公が若松城の大改修を行う際、城郭の屋根を瓦葺にするため播磨藩（兵庫）より瓦工を招き黒瓦の製造をしたのがはじまりであると言われていています。その後、会津藩祖保科正之が尾張国瀬戸生まれの陶工を召し抱えて本格的な陶器の製造をはじめ、陶器の生産は藩の支援を受け益々発展し寛政12年（1800年）には当社の原点となる白磁の製法も開発され幕末には目を見張るばかりに発展いたしました。

当社は原料の調達が可能であったことに加え陶磁器産業が盛んであり碍子（ガイシ）の調達が容易である環境等を勘案したうえで、歴史のある地に当社が誕生し、創業当時は地元の碍子の販売を一手に行う商社的な企業形態がはじまりです。その後、複数の工場を統合し現在に至っています。そもそも社名でもある「碍子」（ガイシ）ですが、なかなか聞き慣れない言葉かと思えます。碍子は電線とその支持物との間を絶縁するもので、送電用碍子、変電所用、配電線用碍子に大きく分類され当社は配電線用碍子を生産しています。

配電線用碍子とは、皆様のご家庭に直結するものでいわゆる電柱についているものであり、主に東北電力株式会社様管内において使用されています。

平成23年3月の東日本大震災においては、被災地への電力の早期復旧に向け、東北電力株式会社様をはじめとした不眠不休での復旧作業をされている皆様の一助となるよう、碍子の発送をはじめとし不眠不休で対応にあたりました。

企業名	会津碍子株式会社
所在地	福島県会津若松市北会津町 上米塚889番地
創業	1952年4月30日
資本金	40百万円
社員	101名
売上高	34億
事業内容	配電線用碍子の製造販売 配電用資機材の販売 事務用品、什器備品販売
事業所	本社・工場：会津若松市 支社：仙台市 製品倉庫：会津美里町



碍子取付例

被災地のいち早いインフラの復旧に向け今、当社は何ができるのか真剣に考え従業員全員が一丸となり、被災地に向けた緊急資材の提供を遺漏なくすすめることができたことは当社にとって大きな財産であると感じました。

それを胸に抱き「**福島は負けない、元気な福島**」を当社から発信していきたいと思えます。

2. QC検定導入の経緯について

当社におけるQC検定導入経緯については、新入社員研修を終えるとOJTが殆どで、その他は年に数回の社内研修と外部研修に委ね、これまで会社が教育研修に定量的な目標を立てて取り組むことはありませんでした。

また、教育研修にかかわるルールも形骸化し、社員教育のありかたそのものが社内での存在価値がなくなり、従業員の意識も低下する一方でした。

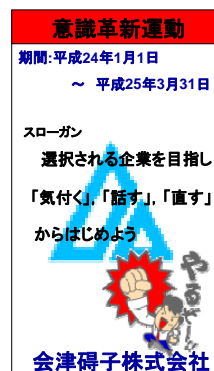
そのような状況を根本的に変えていくため平成23年度から従業員の意識の変革を目的とした「意識革新運動」を展開し、学ぶことについての意識付けをするために、これまで活動を休止していたQCサークル活動を復活させ、「考え、学び、教える」ことをQCサークル活動で実践し、品質管理手法を自分の職場で基礎から体得することができる仕組みをつくり、現在も活動を展開中しています。

上記の活動に加え、当社にとって品質の原点は「人」であることを省みたときに、これまで個々人が習得した品質にかかわる知識を定量的に判断できる手法がないかを模索、検討の結果、QC検定の社内展開が決まりました。

一番大切なのは激変する時代の潮流のなかで円滑な事業運営を図っていくため、更なる個々の能力の向上が最優先であると考え、課題解決能力の向上、即ち、自ら考え行動する人材育成のきっかけとしてQC検定の導入を図りました。

ただ、QC検定の導入を図ることが目的ではなく、中期経営計画に盛り込み、目標を設定することで社内外にコミットメントすることになり、職員各々の目標達成に向けた環境づくりのため、初年度から現在に至るまで会社が取得までの経費を全て負担し、職場単位で取得管理を行いQC検定取得に対する競争原理も生まれました。

また、上級の取得については新たに自己啓発にかかわるルールにインセンティブを設けることで、現在活性化が図られていますが、更なる活性化を図るため人事制度へのリンクを含めた検討が今後の課題となっています。



3. QC検定取組の具体例

「工場勤務者のみならず管理、営業部門においても品質向上は永遠の課題である。当社で働く全従業員を対象として取り組む。」との経営トップの方針が示されたことで、従業員全員にそのメッセージが浸透しており、取得に向け真剣に取り組んでいます。取得に向けた学習方法については、前述のとおり受検料をはじめ全面的に会社がバックアップしており、業務の延長として取り組むことにより、学ぶことの習慣化という意味合いも含め取り組みを進めています。自ら取り組んだ従業員は、自己啓発のルールにQC検定の取得を新たに設け対応することとし、自己啓発の活性化を図っています。

また、取得に向けた教育については、地域に根ざす製造業を核とした企業間の連携組織である会津産業ネットワークフォーラム (ANF) が主催する、QC検定研修会に参加し学習するとともに、更に同フォーラムの紹介により講師を派遣いただき、受検者全員が受講する等、会社が全面的にバックアップしていく体制が整っています。

また、社内にも既取得者との教育連携が生まれ従業員間で教える教わる関係が自然に出来上がり、「教えることは学ぶこと」の相乗効果が徐々に拡大し教える側の能力向上も図られつつあります。

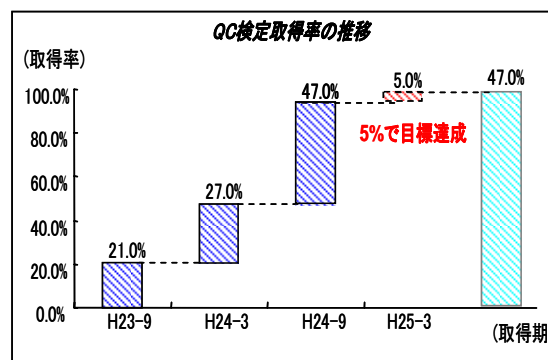
今後は、QC検定をはじめとし自主的、自発的に自己の能力向上に取り組んでいくことで、ひいては当社の経営基盤確立に向けた次代を担う人材育成を、これを期に如何に継続して行くかが今後の当社の経営課題となっています。

4. QC検定受検者の状況・実績

当社におけるQC検定をはじめとした教育全般については総務部の教育担当が事務局となり推進し、内容によっては各部門が企画立案する場合があります。

前段でも記載の通り経営計画に数値目標として取り上げ、平成24年度末(H25.3)には全員が取得することを社内外に宣言している関係から、現在ではQC検定合格者実績は約95パーセントとなり、今年度中には100パーセントを目標に各職場において従業員間でマンツーマンの教育と全体教育を実施しています。

QC検定を導入しまだ日も浅いことから、1級取得者は在籍しませんが、当社における、各級の合格者の声をお届けいたしますのでご参照いただければ幸いです。



2級合格者（第14回2012年9月） 土谷 悠作（入社3年目 事務職）

受検のきっかけは、会社全体でQC検定を取得するという取組みが行なわれたことでした。自分は経理担当であったこともあり、最初はこのような検定は品質管理の業務に携わる人だけが受ければいいのではないかと考えていました。しかし、検定に向け勉強していくうちに、「品質管理」は単に製品の検査や管理といった分野に留まらず、会社業務全てに通じるものであることが分かりました。「品質」の2文字にはとても広い意味があり、「業務品質」という言葉があるように製品・サービスに限らず全ての業務に品質はあります。とてもやりがいのある内容で、勉強を重ねるごとに自分のスキルアップが実感でき、4級から始めたQC検定も気がつけば2級を受検するまでになりました。

受検に向けての勉強は、3級までは上記のような取組みから会社で講師を招いての事前講習を受けることで足りました。しかし、2級からは社内でも受講者が少なく個人で関連書籍を購入し独学で勉強することになりました。2級は学習範囲が広く問題も品質管理への十分な理解が求められるため、暗記だけでは解けないものが殆どです。勉強が苦手な私は会社の休み時間等の僅かな時間も利用して1冊のテキストを繰り返し、繰り返し勉強し、極力問題を多くこなすようにしました。今後2級を受検される方には、1冊だけでは範囲を補えないので、なるべく複数のテキストを勉強し、練習問題に比重を置くことをお勧めします。

その甲斐もあってか2級まで合格することができましたが、今回は辛うじて合格点を確保したといった具合で、とても満足のいくものではありませんでした。また、知識だけでは実践に結びつきません。会社の業務に活かしていくにはまだまだ知識・経験不足であり、合格級に見合う実力をつけるには受検時以上の勉強、社内のQC活動での実践が必要です。

今回の合格はゴールではなくスタートです。今後はまず1級取得を目指していきます。そして、検定で得た知識を会社業務に活かしていくとともに、社内の未受検者や上位級の取得を目指す人、その他品質管理的手法が求められる場での手助けができるよう更に研鑽を積んでいきたいと思えます。

3級合格者（第13回2012年3月） 坂内 由美（入社24年目 技術職）

今回QC検定3級に取り組んだのは、品質管理部に所属する者として資格の必要性を感じたからです。もちろん全社的なQC検定の取組みが後押しになったということもあります。

私は、入社後直ぐに試験関係の業務に配属されました。

最初の頃は、試験を測定値が合格か不合格かを判断する単純な作業として捉えていました。

しかし上司が統計的手法を勉強した人でもあったので、測定値をグラフ化することから始まり、管理図の作成方法や見方、2つの測定値の相関関係などデータから得られる情報を活用することにより、工程の動きが見え対策を取ることで製品の品質を管理できることを教わりました。そこからQC手法に関心を持ち、活用することの重要性を学んだように思います。

しかし、いざ資格を取るとなると意外に基礎知識が不足していることに気づきました。計算はExcel関数を使っていたため、標準偏差の計算式すら憶えておらず、実際に日常使用していない手法は中々頭に入らず、問題集を何度も繰り返しながら試験に臨みました。結果、合格することができ、なんとか面目を保ったというところです。

今回のQC検定受検は、改めて品質管理を勉強するきっかけとなりました。そしてまだまだ知識が不足している事も痛感しています。

今後、業務に有効に活かせるよう更なるスキルアップを実線で図って行きたいと考えています。

4級合格者（第14回2012年9月） 横山 福享（入社1年目 製造職）

新社員研修の時からQC検定4級は社員全員取得を目指していると言われました。商業高校出身の私は、その時初めて「QC」という用語を耳にしました。

検定の準備は本番一週間前から始めましたが、その前から社内勉強会に参加をしたり、過去問を解いてみたり、「4級の手引き」にマーカーを引くなどして重要な単語を覚えたりしました。短期間での準備となりましたが、試験本番では見直しをしても充分時間が余るほど早く終える事ができました。数問自信のない問題もありましたが、自己採点では合格ラインを大きく超えての合格だったのでとても満足しています。

QC検定4級では基礎を学ぶことが出来ました。QCサークル活動や改善活動に少しでも役立てたいと思っています。さらにQCについての知識を深めるためにも、3級、2級の上級取得に向けて努力していきたいと考えます。

以上のように、QC検定を導入したことで上位級を自ら取得する従業員が徐々に増え始めたこと、職場単位で全員が上位級を目指すなどの小単位での取得の動きが見えたことが相乗効果として上げられます。

加えて、その他の資格職取得を自己啓発で目指す従業員も増加し「学ぶ」ことが取り組んでから2年目にして芽が出てきたと感じ、QC検定の導入は当社にとって実効ある取組であると感じています。

5. QC検定と学校に期待すること

QC検定取得については、机上での知識が有効となり上級取得者が必ずしも現場での品質管理スキルが高いかという点だけではなく、取得した知識を現場にいかに対応させていくかについて、広い応用力が求められ、それを適用させていくのは我々管理職の仕事であります。

また、上級取得者はその知識を維持向上させるとともに、会社に対しどのように自らのスキルで貢献できるかを常に考え自ら行動することで、職場の活性化に繋がる大切な資格であると考え、取得者へのインセンティブの付与を図る上からも、QC検定に対する更なる社会的認知度の向上に期待します。

次に教育の現場に期待することは、ものづくりに対する基礎を作っていただくことが大切と考えます。基礎の一つとしてQC検定は必要な資格と考え、採用時の差別化に繋がると考えています。

そこにもう一つ加えていただきたいのは、地域との連携であります。前述で記載したとおり当地には地域に根ざす製造業を核とした企業間の連携組織である会津産業ネットワークフォーラム (ANF) という組織が存在し、行政も積極的に運営に参加するなど、会津地域のものづくりに対する意識の高さが伺えます。

このような組織と連携し、教育の現場と連携し“人づくりはものづくり”となるよう現場に入る機会を増やすことで、QC検定によって得た知識を基に品質管理能力について実践的に体得することで、学生から社会人となったときのギャップが軽減され円滑な就業に繋がると思います。また、我々企業側も学生のニーズを把握し採用や人材を育成に繋げることが可能となると考えます。

是非、教育現場の皆様、学生の皆さんには、QC検定の取得による基礎知識の習得と地域との連携強化による実践でのものづくりにおける品質管理の大切さを体で感じていただくことを期待し、本編を括らせていただきます。

以上